

令和7年度 第1回宇治市部活動地域移行検討委員会会議録

会議名	令和7年度 第1回宇治市部活動地域移行検討委員会
日時	令和7年5月30日(金) 15時00分～17時00分
場所	宇治市生涯学習センター 2階 一般研修室
出席者	<p>(委員) 長積委員長 林口副委員長(欠席) 平田委員 木村委員 矢野委員 中西委員 青木委員 杉本委員 小野委員 須田委員 村上委員</p> <p>(事務局) 福井教育部長 川崎教育副部長 武田教育総合推進センター長 安留学校教育課長 福山生涯学習課長 葛山学校教育副課長 一井学校教育課総括指導主事兼教育指導係長 寺内指導主事 吉田学校教育指導主事</p> <p>脇坂産業観光部長 齊藤産業観光副部長(欠席) 吉田文化スポーツ課長 倉井文化スポーツ副課長 菅居文化スポーツ係長</p>
配布資料	令和7年度第1回宇治市部活動地域移行検討委員会説明資料
<p>1 開会 開会挨拶(事務局)</p> <p>2 報告及び協議事項</p> <p>(1) 「【仮称】宇治市今後の学校部活動の在り方について【素案】」について</p> <p>(2) 「令和7年度実践研究事業について(案)」について</p> <p>(3) 実践研究事業を通して検討していくべき事項について</p> <p>(委員長)</p> <p>協議(1)「仮称宇治市今後の部活動のあり方について【素案】」について事務局から説明をお願いしたい。</p> <p>(事務局)</p> <p>事務局から説明。</p> <p>(委員)</p> <p>地域展開についての説明はあったが、地域連携についてはどのように考えているのか。</p> <p>(事務局)</p> <p>平日の学校部活動は、地域連携を図っていきたいと考えている。休日に関しては、地域に展開していくことも念頭に置いて、素案を作成している。</p> <p>(委員長)</p> <p>昨年度の検討委員会の中の議論の中で、合同部活動についての意見があった。合同部活動については、教員の意向を受けとめながら、教員・地域の外部の指導者も借り受けながら実施する形が考えられる。</p> <p>(委員)</p> <p>この素案が宇治市の指針につながっていくと思うので、地域連携に関して、合同部活動や拠点校方式について明記されなければならないのではないかと。また、合同部活動や拠点校方式での活動については、市教委や事務局で行っていくのか。</p>	

(事務局)

現在学校部活動の地域連携の面では、部活動指導員の活用などを進めている。一方で、合同部活動や、拠点校部活動について、現在進めていることはない。

(委員長)

今後この素案については、追記を行っていき、さらにバージョンアップしていく形でいいのではないかと。具体的なオペレーションの問題はこれから詰めていかないといけないと思う。地域連携に関しては合同部活動や拠点校部活動をイメージしたものを今後付け加えていけると良い。そして、さらに議論を行い、ブラッシュアップされるという方向が良いと感じる。

(委員)

素案の4ページに考え方のイメージがあるが、部活動指導員の配置等拠点校方式による合同部活動について書かれているので、これをどういうふうにご考えておられるのか、その説明はなくてよいのか。

(事務局)

実践研究事業の中で拠点校部活動や合同部活動のエッセンスも、加えながら実践研究を行っていきたいと考えている。その結果を踏まえて、素案の内容をさらにブラッシュアップする中で、内容の検討のご協力をお願いしたい。

(委員長)

具体的なイメージをどうしていくのか、どんな仕組みにするのか、どんな役割分担するのか、実践研究事業も踏まえながら、今年度さらにブラッシュアップできるような形をお願いしたい。

(委員)

学校間の動きをもう少しイメージできるような図にしておかないと、言葉だけでは理解しにくい。学校の部活動がどういうふう展開されていくのかももう少し伝えられるようにして欲しい。

(委員長)

エリアごとの学校の拠点校等、イメージはあるのか。

(委員)

明確なものはないが、イメージは持っている。交通のことがあるので、近いエリアをある程度決めたいと思う。今後の調査のためにアンケートを考え、作っているところである。

(委員長)

拠点校部活動を行うときに、どんな問題をクリアすべきなのか、どの学校とどの学校ができるのか、種目はどうかなど、起こり得るであろう、想定されるであろうという課題を整理しておけるとよい。

(委員)

中体連では、合同チームになったときに出られない大会が出てくるのか。

(委員)

条件はあるが、チームを組んで認められたチームであれば、全国大会まで出場できる。

(委員)

いくつかの学校が集まって1つのチームになった後に、自校で単独で活動できる部が出た際に、切り離されるほかの部が出てきたときのフォローをどうするのか具体的にイメージ持っておいたほうがよい。

(委員)

前年度秋の大会で、合同チームを組んでいけば、今年の夏は合同で継続して行えるという、ルールもある。基本的には救済できるようにルールはつくられている。

(委員)

子どもたちに文化活動を少しでも伝えないといけないと感じるが、なかなか学校の門戸が開かれていないように感じる。学校でも話は聞いていただけるが、具体的な活動は難しい。出前授業で小学5年生を中心に行かせていただいたことはあるが、中学校との繋がりがあまりないように感じている。

(委員長)

今の部活動に入っていない子どもたちに新しい機会を開くために、体験会を開いて何か受け皿を準備していくことで、各団体での活動がしやすくなる。

(委員)

部活動の地域展開に取り組んでいる学校に行ったときに、中学生が入会できる、スポーツから文化芸術活動まですべてを網羅した、1枚のポスターのようなものが作られていた。小学生も中学生も関係なく、それを見て、例えば音楽や文化のことに興味があると思ったら、そこに問い合わせをして体験から始めたり、入会できたりなど、体験に行き一番自分に合うところを選ぶことができる。体験などが網羅されたものを市として作っていけば、子どもたちにはその学校の部活動以外にも活動に参加しやすいと思う。

(事務局)

文化芸術団体の地域展開について、今年度は文化芸術活動の実践研究事業に向けた調整を行おうと考えている。来年度どういった文化芸術活動での実践研究事業を行うのか、決まっていない部分もある。

(委員長)

体験会等を行っていくことで、子ども達がやりたいという声にはこたえられるようにしていけると思う。

(委員)

今後文化芸術活動の実践研究事業に向けて、どういう課題なり問題があるのかというようなことも、整理をしていく必要があり、調整を図りながら考えていきたい。

(委員)

音楽連盟の加盟団体は、年齢層が非常に高く、中学生を受入れるという話になるとかなりギャップがあるのが実情だ。合唱に取り組んでいる子どもは少ない。合唱をしたいという子どもの掘り起こしも必要である。それができれば、指導者も考えていける。

(委員長)

今の若い人のスタイルに合わせていくような形の活動を提案するということもあるのかと思う。

(委員)

指導の中身を若い人に合わせるのは難しい部分もある。中学生のニーズに合ったような人を、探すことはできるかもしれない。

(委員長)

我々の物差しと子どもたちの物差しも違うところがあるので、そこはうまくすり合わせしなければ

いけない。

(委員)

来年以降、実践研究事業がどういう動きになるかまだ決まっていない。実施種目が、1年ぐらい前から分かっていないと、それだけの準備をしないと対応できないことがあるため、まだ決まっていないということが気になっている。

(事務局)

実践研究事業の実施種目については前もってお願いする形をとっていきたい。今年度は、部活動指導員をされている方を想定している。どういった団体もしくはどういった個人にお願いするということも含めて、また実践研究事業の中で、どういった段階を踏んでいくべきなのかということも検証していきたい。

(委員長)

細かい部分を決めづらいところはある。実践研究事業をやって出てきた課題を整理しながら、方針を少しずつ固めていく形になると思う。懸念されることを、言っていただきながら、事務局と相談して、先をできる限り見越して、アクションができていけば多少不安は解消されていくと思う。オペレーションの部分は、まだ十分固まっているわけではないのでそれは実証事業を重ねて、スタンダードのようなものを作ればよい。

(委員)

合唱をしたいという需要は絶対あるだろう。学校にクラブがない、もしくはクラブが少ないところも、子どもが体験したりそれを感じたりする中で、そもそもできるというのを知っていれば変わってくると思う。

地域連携・地域展開の言葉を初めて聞いた保護者は、ほぼ一緒のイメージになるだろうと思う。地域展開等のイメージ図の平日のところに図が並列であれば、意味がわかりやすいと思う。

(委員長)

新しい活動の形態や、活動の種目の可能性を広げていったときに、選択肢が増えることはいいと思う。ぜひ地域の方々と一緒にやっていったらよい。また、一般の人がこの素案を読んだときに地域連携の想像がつかない。一般の方々が認識されるような表現で説明をしていけるとよい。

(委員)

社会背景の変化の中にあっても、子どもたちが、多様なスポーツ、文化芸術活動を選択できるように目指すと素案に書いてあるので、宇治市として、文化芸術活動、スポーツも含めて、子どもの受け入れができる団体を発掘し、増やしていかないと、地域展開が間違いなく進まないと感じている。宇治市がきっかけとなるような団体などのプレゼンがあってもよい。体験をする機会をつくり、クラブをしてない子どもが知ることによってその道が開けることもある。道筋を宇治市が、発掘して、プレゼンして、どんどん地域の団体が活動しているところがあることを示していく。そういう土台を作っていくことで地域展開ができればと思った。

(委員長)

体験活動ができて、楽しいと思ったらその受け皿とセットになるような形がある方がよい。

(事務局)

例えば昨年度アンケートをとった中でも、既存の部活動にはない、ホッケーやバレエなどの団体が

受け入れ可能だと答えられている。来年度以降も実践研究事業を進めていく中で、新たなスポーツの体験ができるような実践研究事業も選択肢の1つだと考えている。

(委員長)

他の市町では、小学校6年生を対象にして体験会を行い、中学校に入ったらこんなことができるということを示している場合もある。次に入ってくる子どもたちに何か楔を打つようなこともぜひ実践研究事業で考えてもらえればよい。

(委員)

どこでやるかというところ、吹奏楽だと楽器をどうするのか、場所の問題など現実どうするのかネックになってくる。拠点校という形をとっても、隣の学校ないし活動場所へ行くのに、交通の便や安全面も関わってくるので、その辺がもう少しクリアにならないと、イメージしにくい印象がある。

(事務局)

場所の問題や用具の問題をまだ事務局の中で検討できていない。事務局の中で、今年度検討していきたい。

(委員長)

平日に拠点校で活動する場合には、学校管理下にするか管理下外にするのか、時間をずらすことも考えなければいけない。安全面のオペレーションの課題もある。そういった可能性が模索できそうなパターンを実践研究事業で見い出していけるとよい。

次に協議(2)「令和7年度実践研究事業について(案)」について説明をお願いしたい。

(事務局)

事務局から説明。

(委員長)

合わせて協議(3)実践研究事業を通して検討していくべき事項についても説明をお願いしたい。

(事務局)

事務局から説明。

(委員長)

今年実践研究事業を通してどういったことを検証しようとしているのか。

(事務局)

生徒が安全安心に取り組める体制の構築と、運営団体のシステム構築について検証していきたい。

(委員)

東宇治中学校と黄檗中学校の顧問は、どういった関わりをしていくのか。

(事務局)

顧問が当日実際どのような動きをするのかについて細かい部分は、詰めきれていない。地域人材の指導者や運営団体の方で、責任を持って活動していくということが基本になる。

(委員)

土曜日に学校の部活動をして、日曜日はこちらの活動をするというようなイメージか。

(事務局)

実践研究事業と同じ日には部活動を行わないという形を考えている。学校と詰めきれていない部分もあるので、今後検討していきたい。

(委員)

ソフトテニスでは10月に毎週のように、太陽ヶ丘で大会等があるため、実際10月に地域のクラブ活動を行うのが難しいと感じている。生徒同士のトラブルや、指導者と生徒、指導者と保護者のトラブルがあったときに、顧問や学校は間に入るのか、どこが窓口になるのかが気になる。また、ボールなどの必要な道具はどこのものを使うのか、もしそれを、壊してしまったときはどうなるのかも気になる。

(事務局)

実際の指導を見通した部分は、今後学校や指導者の方と一緒に詰めていきたい。

(委員長)

学校管理下外で行ったときの責任や何かあったときのトラブルを引き受けるかという、一定の線引きはしておく必要がある。

(委員)

昨年度検討委員会の中で対象校を選ぶ基準として、生徒数が減少していて、部活動の見直しが必要となってくる学校や子どもの活動が困難になる活動となっていた。黄檗中、東宇治中もソフトテニスを経験されてきた方がおられるため、何か困っていることがある学校で検証しないと意味がないと感じる。また、今後、地域展開するときに近い学校同士とは限らないので、あえて近くないところを選ぶ、自転車で通うことを想定して行うなど、困難なことや学校がこれからクリアしないといけないことを検証しないと、成果としてどう判断していいのかが難しい。選び方が、あまりにも条件が整ったところでやっているのでもいいのかと思う。

(事務局)

今年度対象校を選定した理由として、ある程度参加人数を見込みたいところもあった。実際に実践研究事業を行っても参加者が少ないなど、見通しが持てない部分を懸念したところもあった。また、普段の部活動の合同チームとの違いを明確にするために、現在合同チームを組んでいない学校を選んだという経緯もある。

(委員長)

東宇治中の子どもが黄檗中に行ったり、黄檗中の子どもが東宇治中に行ったりすることは今回検証するのか。

(事務局)

東宇治中の生徒が黄檗中のグラウンドに行って練習をする、もしくは、東宇治中のグラウンドに黄檗中の生徒が行って練習する、また市内の施設に両方の生徒が集まる形での活動を考えている。

(委員)

今後自転車で移動をどうしていくのかも検証してほしい。実証事業としては、やはり困難なことに挑戦してほしい。部活を減らしている学校もあり、どの学校も苦しんでいるところがあると思う。そういう状況の中で地域展開や拠点校部活動で救えないかを考えているので、条件のそろった状態で検証するのであれば、そういう状況を分かったうえでクリアしてもらえるようなことをやってもらいたい。

(委員長)

昨年度の提案から、前進させた点はどこか。

(事務局)

今すでに合同チームを組んでいないところでの活動を行っていくという点では現状にはない形での活動を考えている。

(事務局)

もうすでに合同で活動しているところを、システム研究するというのでは、物足りないなというのはあるかと思う。その中で、まず経験していないような形を取り入れるという点は、前回から変わったところである。その中でも、距離や、移動手段など課題となるハードルがあると感じる。進めていく中で、実践研究事業を次につなげられるような形で行っていききたいという思いがあった。それも含めて我々も次につなげていくための実践研究事業を進めていききたいと思っている。

(委員長)

2つの学校の距離はどれぐらいか。

(委員)

500mから1kmほどである。

(委員)

黄檗中の顧問として指導に関して特に困っていることはなく、子どもたちも学校の部活動で満足している状況である。地域クラブ活動を5回、月に1回するとなると、おそらく学校の部活動は休みにすると思うが、次の週、学校で平日や土日に部活動ができるし、もう地域クラブ活動は行かなくていいと受け取る生徒が多いと思う。例えば11月や12月は大会などがあまりないため、この1ヶ月間は学校の部活動は、土日は行わない代わりに、地域クラブ活動をこの1ヶ月で行ったほうが、子どもたちの参加率は上がると感じる。

(委員長)

10月に大会が集中して11月12月がそうでもないという状況ならば、月1回ではなく毎週や2週間に1回のペースで行うなど、パターンみたいなものが定着するような形で行い、その週末にある活動の習慣化を図るような形であればよいと感じた。

(事務局)

事務局としても今後検討していきたい。

(事務局)

自転車の活用については様々な状況もあると思う。事務局としては安全のことも含めて、除外しようという判断をしているが、今後の地域展開を考えたときに、移動手段については検討が必要になる。学校とも相談しながら、検討委員会の意見も踏まえて、今後どういうふうにしていくか検討していきたい。また、活動の回数や時期については、学校の状況を十分に踏まえたものではなかったかもしれない。現場の先生方からするとハードルが低いと思われる部分もあるかもしれないが、しっかりとペースを整えながら、進めていきたい。

(委員長)

いずれ自転車の活用を考えていくのであれば、今年近い距離だから何か考えてみるとか、毎回ではなくても1回はやってみることがあってもよい。ぜひ事務局で検討してもらいたいのは、11月12月に複数回行うなど、少しでもチャレンジングなことをしていただけることがもし可能ならば、新しいパターンが何か子どもたちの中に当たり前になって、日常化するような形が検証できるとよい。

(委員)

令和7年は女子ソフトテニスで実践研究事業をされると思うが、令和8年は継続されるのか。素案の中では、モデルとして書いてあるので、令和7年実践研究事業を行った東宇治中、黄檗中は、令和8年、令和9年には地域クラブ活動としてやっていくという見通しで考えているのか。

(事務局)

まだ決まっていない。このモデル事業としてといった部分に関しても、今年度の実践の中で検証したものをベースとしながら、来年度以降の種目なども選んでいきたいと考えている。

(委員長)

できるかできないかということも大切だが、次年度どうなるか今年やってみないと分からないではなく、3年後には、地域クラブ化を図るということを前提に必要なことを検証されるようなイメージを持ってもらいたい。学校管理下外での地域クラブ化を考えているとするならば、どの年度にどこまでやりたいかを見据えて調整したほうがよい。

(委員)

検証するのであれば、いろんなパターンを取り入れるべきだと感じる。予算など、今から変更がきかない部分もあるかもしれないが、黄檗中と東宇治中のソフトテニスだけに焦点を当てて、実践研究事業を行うのはよいが、もっといろいろなパターンはできないのかなと思った。

(委員長)

今年度に、可能性が模索できるパターンのようなバラエティに富んだものをいくつか出してもらったほうがよい。早い段階で来年や再来年の見通しを持っておく方が、宇治市が積み重ねていくプロセスが見えやすいと思うので、検討いただきたい。

(事務局)

今のご意見をもとに、今後検討していきたい。

(委員)

宇治市の中学校は自転車通学ができるのか。

(事務局)

地域によっては、許可している学校もある。

(委員長)

大通りを通らなければいけなくなる可能性があるため安全の問題を考える必要もある。

(委員)

ソフトテニスの指導者は決まっているのか。

(事務局)

今回実践研究事業の2校を選んだ経緯として、部活指導員の方が熱心に指導してくださっているところをもとに選んだところがある。そのため、現在東宇治中学校の部活指導員をされている方を中心に、選定作業を進めている。

(委員)

そのような実践研究事業の形では、あまり検証にならないと感じる。

(委員長)

確実に1年目、形を整えて実施できたという実績も重要になる。今日提案のあったことは行い、今

年度の実践研究事業の中で、新しい形でどういう運営体制にしていくか、どのようなことが調整で必要かを洗い出していけると思う。検証の中で目に見える部分と、バックヤードの部分がある。今年度についてはバックヤードの部分をきっちりと検証したいというのが事務局の思いである。学校の現場の先生方からすると、当たり前のことをやっているように感じるかもしれないが、これを外部の方々をお願いしていく中で、マニュアル等を整えていっていただきたい。

(委員)

東宇治中と黄檗中のソフトテニス実践研究事業として違うなと強烈に思う。必要性を何も感じていない子どもたちや保護者に一体何を提案するのか。エンジョイテニスを目指しているところとチャンピオンを目指しているところが一緒になると、練習内容や指導方針が違う。東宇治中の部活指導員が来られて、黄檗の子どもがそれで楽しいかという、決して楽しくないと思うし、指導者も悩むと思う。

お互いの顧問同士で、「こういうふうに子どもたちを育成していきましょう」というのがあり、外部コーチをお願いするのが本来の形だが、それがないため、非常に安易で、子どもにとってではなく、教師を月に1回、休日に休む形をつくるようにしか受けとめられない。

やりたいスポーツができない環境にある子どもで実証するべきだと思う。それに対してハードルをどのように乗り越えていったか。宇治市は山間部もあり、鉄道、道路網もない、そういうところで、地域移行をどうしていくのかというのは本当にいいモデルだと感じるため、チャレンジするべきだと思う。そういった点で実践研究事業としてのスタートが違うなという気は強烈にしていた。

(委員長)

後者の方はぜひ、来年度以降にチャレンジしたいと思う。チャレンジするパターンを今年度いくつか提案をしていただいた上で、次年度に反映できるか再来年になるかどうかかわからないが、早い段階で提案をしていただきたいと思った。

(委員)

現在の黄檗中の部活動では、子どもたちも楽しく部活動ができたらというような気持ちで活動を行っている。そういった点は大丈夫だと思うが、ルールや、練習の雰囲気などを大事にしているため、違う方に指導してもらって、帰ってきたときに、雰囲気が変わっているとやりにくい部分がある。

(委員長)

平日の指導を学校の先生、週末の指導を地域の方々が行ったときに、うまく連携していかないと、言われたようなことが起こり、子どもたちを混乱させることが想定される。その辺りは指導者と教員でコミュニケーションをとっていただきたい。

(事務局)

今後、土日の地域展開を考えていくと、土日の指導者と、平日の指導者のミスマッチなどの課題が出てくる。そういったことも踏まえて平日の地域展開も、ゆくゆくはどう進めていくか考えていかなければならない。おっしゃっていただいた部分も含めて、検証していきたい。

(委員長)

想定しうることは、先に楔を打っておいたほうがよい。

(委員)

指導者のフォローを確実に入れてほしい。宇治市に協力していただける方を市でバックアップして

いただければと思った。

(事務局)

新たにつくり上げるベースの部分で、さらに課題も出てくると思っている。そういったところもご意見をいただきながら、様々なことを検証して、明確にし、解決していきたい。

(委員長)

指導者のフォローも想定されるため、実践研究事業の検証の中に盛り込んでもらえるといい。

(委員)

実践研究事業だけに集中していると、その先どうしていくのかが見えなくなってくる。令和7年度で、この検討委員会は終わるが、その先の何年かをどうイメージされているのか、指導者の確保についてや、運営団体を最終どういう形をするのかなど、先を見ていかないと、実践研究事業だけにとらわれていると、後手に回ると思う。その辺のビジョンをしっかりとっていただきたい。

(委員長)

宇治市が最終的に目指すところを見据えておく必要がある。最終的な目指すところが見えた中で、何が検証されていくのかということが、シナリオとして見えて欲しい。

(事務局)

国の部活動の地域展開に係る方針が5月半ばに出た。それを踏まえての議論は、事務局の中でできていない。ゴールを見据えて、道筋を考えた上で、実践事業を進めていくということが、非常に大切だと思っている。実践研究事業の内容を検討していくということと合わせて、今後の道筋も検討していきたい。

(委員長)

道筋として整えていくということと、整えていく中で起こることは、二本立て想定して考えなければいけない。オペレーションの部分と、積み重ねていく部分が、年次でどうなっていくのかという道筋が示されるといい。

(委員)

指導者の資格は何も問わないのか。

(事務局)

資格については考えていない。他の自治体では、地域クラブ活動として認定されたところに生徒が行く形や、自治体が認めた指導者が指導する形、特に資格はなく、広く人材を集めて指導する形など、いろいろなパターンが混在している。今年度の実践研究事業を通して、指導の内容や、生徒への関わり方なども指導者の方に、お伝えしていきたい。

(委員長)

技術指導という視点からすると資格は重要と思うが、他の市町の保護者の方々に聞くと技術の指導ができる有資格者であればありがたいが、思春期の子どもたちの目線に立って寄り添えるような指導ができる方がいいという話も聞いている。保護者の方々としては、学校の先生は、子供たちに向き合うことを前提とされた職業だが、地域の方々は必ずしもそうでないときに、過度な勝利至上主義は危惧されることがあるため、そういった点はクリアする必要がある。

(委員)

10月に実施予定の検討委員会は11月に延期か。

(委員長)

視察を10月にすることは難しいというお話だった。視察と検討委員会が重ならなければならないということもない。

(委員)

学校の先生方の残業代を出すべきだと思う。

(委員長)

特別勤務手当をどうするのかというのは気になっている。週末に出していたものを、国はどのように考え、その財源を新しい地域クラブ活動に充ててくれるのかという声を聞いたことがある。

次回の検討委員会は実践研究事業直前になると思う。一定、形ができているところで行うため、大きな不安等はないのかもしれないが、今後さらに詳細な検討をお願いしたい。素案の中で、地域連携や、最終的に宇治市が目指すイメージなども盛り込み、どの年度でどんなことを達成していくのかというタイムラインが見えたほうがよいという話もあった。そういった点を踏まえ、どんなパターンを検証できればよいのかというラインアップのようなものを次回の検討委員会で出していただければよい。素案や実践研究事業についてさらにブラッシュアップしていただき、9月以降に始まる実践研究事業の具体的な進め方や、準備状況、検証できる内容などを、次回はお出せたらいいのかなと思う。

3 閉会

閉会挨拶（事務局）